

『諜報日誌、102.255。ぼくはイギリス、エдинバラを訪れている。今回のぼくの任務はここにあるヴィオレットの園と呼ばれる館で潜入捜査をすることだ……』

ヴィオレットの園はヴィクトリア朝時代の宮殿を模した館で、建物自体が大きいだけでなく周辺一帯の土地を買い占め庭園を築き、城壁や堀まで設けられている喫茶店だった。水晶宮のように天井はドーム状のガラスに覆われ、そのなかに一歩入ればヴィクトリア朝時代にタイムスリップした気分を味わえる。

秘密主義でも知られ内部の写真撮影は禁止。ドーム部分に特殊な加工がされているため衛星からは真っ白に見える。セキュリティ・システムも最小限で防犯カメラのようなものもなく、遠隔で内部の様子を知ることは困難だった。

経営者はヴィオレットという19歳の少女でその天才的頭脳によつて株取引で大成功し若くして一生遊んで暮らせる財産を築き上げてヴィオレットの園を建てたのだ。もちろん単なる道楽で経営しているのではなく、きちんとした收支計画のある実業だった。

ヴィオレットはお嬢さまと呼ばれていて、従業員はメイド。客はお嬢さまの友人という設定だった。

テーリはエдинバラに赴任し、小型通信機で本部と通信。ヴィオレットの園に潜入。

『この喫茶店のなにをスペイしろって言うんです?』

『過去、何度か当局が犯罪組織の資金移動の経路を追跡したとき、その喫茶店で複数回、資金の足取りが掴めなくなつた。その喫茶店は資金洗浄に利用されている可能性がある。それを探つて可能であれば取引現場を撮影し証拠を押さえろ』

入口で料金を支払い入館。本名の必要はないが、どう呼ばれたいかという名前を記入。希望のレンタル衣装を指定。そしてメイド姿の女性従業員がプレスレットを渡し言つた。「プレスレットは入退場のほか施設のさまざまな場所で必要になります。入場後1時間までは無料です。それ以上は延長料金が自動発生し退場時にお支払いいただきますのでご注意ください。館内への飲食物の持ち込み、館内での写真撮影、録画、録音は禁止。記念撮影をご希望でしたら、専門のスタッフにお申し付けください。その他諸々の注意事項に関してはパンフレットの裏面をご覧ください。それでは行つてらっしゃいませ、ハセガワ・マリお嬢さま』

プレスレットは見た目こそ奥ゆかしい年代的な木製の腕輪だったが、なかにチップが埋め込まれていた。

彼女は最初思つていたよりだいぶ大仰な対応にどぎまぎしてしまつた。

(お嬢さま!? ぼくがお嬢さま!? 入館料つて、これつて喫茶店というより遊園地じゃないの……?)

と、テーリはちょっとと思った。

彼女は待機列ですこし待たされた。客は女性ばかり。男性もちらほらいるがカップルの片割れだった。

（なるほど、それでぼくに……てか、喫茶店で待機列って）

待機列がすこし進んで、その先で男女に別れた。更衣室だ。

「ここで衣装にお着替えください」

更衣室はそれぞれ個室が用意されており、メイド姿の女性従業員がひとりひとりついて、着付けをしてくれた。更衣室 자체しゃれた感じで、彼女はなんとなくだんだん気分が盛り上がりつつあった。

レンタルの衣装と言うものの、当時の質感を完璧に再現した衣装単体でも思わず欲しくなってしまうクオリティのものだった。あまりにもヴィクトリア朝時代を再現していて、足元まで届くロングスカートで動きにくいのが玉に瑕だった。

着替えが終わって先に進むと、大きな門のまえでひとりのメイドが待っていた。彼女は鋭い目つきでつやつやの黒いセミロングで、身長が高く、気高い女性に見えた。

「お初にお目にかかります、お嬢さまのご友人の紳士淑女のみなさま。わたくし、この園のメイド長のマヤと申します。お客様にご案内します。当館はヴィクトリア朝の再現を徹

底的に追求しています。ですから、館内に現代的なものの持ち込みはご遠慮して頂いております。カメラ、携帯電話、その他当時のイギリスに存在しなかったものをもしお持ちであれば、ここでお預けください。ご安心ください。ブレスレットの ID と照合し退場時に返却いたします。門は金属探知機も搭載しておりますことを念頭に置いてください」

すると何人かはおとなしく携帯電話をだし、ID を登録した。

テーリは本部との通信機があつたので迷つたが、本部にこう告げた。

『金属探知機があるようです。ここで通信機等は電源をオフにして外します』

それらは傍から見ればイヤホンにしか見えない。彼女はそれを調べられることはないと思つていた。

もし取引現場を発見した場合に備えフィルムカメラなども持つていた。デジタルカメラの証拠能力が有効だった判例は多く、一時は警察用の改竄防止機構搭載のデジタルカメラが導入されたこともあつたが、ハッキング手法も多様化し、警察やスペイが証拠を集めるときは法廷で確實に証拠能力を認めさせるためフィルムカメラを使うことが原則だった。彼女はそれを手放しては証拠が集められないで躊躇した。だがそもそもまだここで証拠が見つかるという確証もない状態なので、彼女はひとまずここでの規則を優先し、それらは諦めることに決めた。

彼女は金属探知機にひっかかりそうなものをだいたい外し、マヤに預けた。
そして彼女は園に入り、思わず感嘆の声をあげてしまった。

ヴィオレットの園は外界とはまさに別世界だった。高い壁や植物が背景からビルを巧妙に隠し、現代を思わせるものはなにひとつ見えなかつた。天井はガラス張りで木々の葉の影がコントラストをなしていた。従業員だけでなく客の衣装まで当時のそれに変えられているから、どこを向いてなにを見ようとも、現代が2072年だと思わせるものはなにもなかつた。

テーリ自身派手なドレスに着替えていて、彼女はまるでほんとうにヴィクトリア朝時代にきてしまつたと感じた。

（今回はあくまで仕事だけど、なにか機会があれば仕事じゃなくてもきてみたいかも！）

彼女は内心、仕事を忘れてわくわくしていた。ここで遊びたかったのだ。

ヴィオレットの園は中心にヴィオレットの館があり、その周囲に大きな庭園があつた。テーリは最初遊園地かと思ったが、アトラクションのようなものはなかつた。代わりに庭園にあるものはすべてが売り物だつた。

園の東にぶどう畑があつて、ブレスレットのIDが自動的に彼女を識別した。ぶどう畑でメイドたちが水をやつていて、隣の醸造所ではそれでワインをつくっていた。テーリが

畠のあちこち歩いて見物していると、メイドがこうたずねた。

「よかつたらぶどう、食べます？」

「えつ、いいんですか!?」

「はい。ひと房50ポンドになります」

「高……っ！」

メイドはにっこり営業的な笑みを崩さず耳に入らぬふりをしていた。

「なんでしょう？」

「いえ、なんでもありません」

テーリは思った。

(相場よりかなり高いけど、ここで食べるという体験には価値があると思う)
なので彼女は答えた。

「ひつ、ひと房ください！」

彼女はぶどうをかごにいれ食べ歩き、お肌がつやつやになり満面の笑みで思っていた。
(それに仕事中だからどうせ経費で落ちるしつつー)

ヴィオレットの園の外側は畠が多く、園の中心にヴィオレットの館があり、その正面は広間になつていて噴水があつた。噴水の周囲にはパン屋さん等いろいろなお店があつた。

それらも軒並み相場よりずいぶん高いものの粗悪品を売っているわけではなく一流のパン職人を雇っていたりして、値段相応のおいしさだった。

鍛冶職人やガラス職人がヴィクトリア朝時代らしい恰好をしてそれらを加工している。完成したものはそのまま店頭に並べられて売られていた。

館の正面の噴水のそばで芸術家が絵画を描いていた。テーリはそれを横から覗いたが、本物の芸術家でおそろしく上手な風景画を描いている。どうやらヴィオレットに雇われているようだつた。噴水に立てかけられている作品の値段は彼女の手ができるものではないしさすがに経費では落ちないだろう。

噴水の周囲ではアコードィオンの音楽にあわせて吟遊詩人が自由の贊歌を歌っていた。アダム・スミスの自由放任主義を称える歌だ。それは産業革命とともに、経済政策の面でヴィクトリア朝時代を大きく特徴づけるものだつた。

彼女は経費で落ちるというのもあって若干割高で高級な食べものやお土産を躊躇せずにどんどん買ってしまった。

彼女は園の端から端まで歩きまわった。園のなかでも外壁に近い場所、群衆から離れ、鳥のさえずりと川のせせらぎ以外の音が聞こえない林のなかで、彼女はふたり連れの不審な女性を見た。服装はほかの客にもレンタルされているヴィクトリア朝時代のシスターの衣

装だつたが、ふたりともあまりお土産には見えない、大きな荷物を運んでいた。

「重いですね、ローズさん」

ひとりの女性がそう言つた。連れの女性が答えた。

「ルビー、100万ポンドは20kg。そりや重い。でも洗濯物を運ぶのと変わらない」

「ここまでくると体力勝負ですね。でも、100万ポンド。大事な仕事です」

それらの会話を聞き、テーリはそれが資金洗浄の現場だと確信した。

(もしも彼女らが100万ポンドをほんとうに運んでいるのだとすれば資金洗浄の現場にちがいない！　まさかこんなに早く見つかるなんて……！)

それから彼女は思わずカメラを取り出そうとしたが、マヤに預けていたことを思い出し慌てた。

(あーっ、そういうえば預けてたんだつた！　これじゃあ証拠が撮れない！)

彼女は木陰で大慌てで頭を抱えていた。そうしているとルビーとローズがそこを通つて彼女はローズにぶつかってしまった。

当然、ローズにぎろりと睨まれるテーリ。

「やります？」

ルビーが懐に手を忍ばせ、ローズにたずねた。テーリはそれが銃だと思った。

「バババ、ごめんなさい！」

テーリは反射的に謝った。内心大泣きしていた。

（ひーっ、武器もないし、たつ、助けてーっ！）

「いや、ここで騒ぎになるのはまずい」

ローズはテーリの頭をぽんぽんと叩いた。

「ガキが。おれたちのことはだれにも話すなよ」

こうしてふたりはテーリを見逃した。

ふたりがその場から離れたのでテーリはほっと胸をなでおろした。
しかしそのとき彼女はすこし違和感を感じた。

（あれ？　ふたり、ブレスレットをしてない……？）

客は全員ブレスレットをつけているはずだった。

ブレスレットを腕につける義務はなく、かばんのなかにいれている客もいたのだが。

ルビーとローズは20代。テーリが明らかにティーンエイジャーだったのも、ふたりが彼女を見逃す理由ではあった。ふたりは彼女がスペイだとは思わなかつたし、それ以上にたとえ見られていたとしてできることはなかつた。

ルビーはとっさに演技をしたがほんとうは銃なんてなかつた。はつたりだつた。

それ以前に銃があつたとしてヴィオレットの園で死体をだすことはできない。

ふたりは上司に報告することすらできなかつた。

ルビーとローズはある人物の命令で動いていた。しかしここでテーリに見られたことを報告すればふたりとも立場が危うくなる。ふたりは囚人のジレンマを抱えていたのだ。

テーリからすこし離れ、だれにも聞こえないようにローズはルビーに言つた。

「あいつのことは、だれにも話すな。もしもあのおかたに知られれば、首を切られるのはおれたちだ。それに、あんなガキがなにかに気づくとは思えない」

ルビーは汗をかいてこくこくと頷いた。彼女はローズの言いなりだつた。

さて、一方この園のメイド長のマヤは回収した金属類を調査していた。ほとんどは単に電話やカメラであやしいものではない。だが念のため彼女は調べていた。

ひとつひとつ手作業でアナライザで調べていたため、なにか外部と通信しているものがあればすぐにわかる。ただし携帯電話でも電源がオフになつていれば当然、反応しない。

彼女はある物品を見て違和感を感じた。

(イヤホン……?)

その奥で紅茶を飲みながら彼女の仕事ぶりを見ている少女がいた。

彼女はマヤが一瞬だけ手を止めてなにかを見つめていることを瞬時に察知した。

「マヤ、どうかしたの？」

小柄でショートヘアの少女。

透き通った空色の髪が窓から射し込む日光できらりと光っていた。

メイドばかりのこの園で、メイド服ではなくドレスを着ている少女。

マヤは答えた。

「いえ、お嬢さま、なんでも……」

お嬢さまと呼ばれた少女はティーカップをお皿に置き、席を立つて彼女のそばへ。

彼女はマヤの後ろから肩に触れた。

するとマヤは反射的にイヤホンを机に置き、作業を停止しその場に跪く。

少女は首を垂れるマヤのあごに手を伸ばし、見上げさせた。

身長はマヤのほうが高い。そんな彼女を小さな少女がいじわるそうに見下ろしていた。

「すこしでもなにかに気づいたら知らせる約束よ

「もっ、申し訳ありません！」

「このイヤホンがなにかあやしいと思ったのね？」

彼女はさきほどまでマヤが調べていたイヤホンを見る。

「あやしいとまでは……アナライザにも反応しませんでした」

「マヤの直観は信頼しているわ。あら、スイッチがある。押してみましょう」「お嬢さま！ 万が一のことがあれば危険です！」

彼女は躊躇せずそのスイッチを押した。

するとアナライザがビープ音鳴らし反応した。

(逆探知して)

少女はアイコンタクトと唇の動きだけでそう伝えた。

万が一の場合に備え逆探知の用意はあったが、マヤは慌てていた。

彼女が逆探知を試みた瞬間、通信は向こうから切断された。同時にアナライザのビープ音も停止し、マヤはほっと一息ついた。

「イヤホン型の通信装置でしようか」

「そうね。それ自体は珍しくはないけど逆探知を試みた瞬間切断した。ふつうなら逆探知されていることにも気づかない」

マヤはその一瞬の逆探知の結果を伝えた。

「北アメリカ大陸と一瞬だけコネクションが張られていました」

「アメリカ、ね。これはなにがあるわね」

そんなかれらのことはつゆ知らず、テーリは仕事も忘れてついに園の中心の館で紅茶を

嗜みこのヴィクトリア朝の体験にどっぷり浸かって楽しんでいた。

ヴィオレットの館は園の中心に位置する喫茶店でメニューは割高だが、高級なテーブルや椅子、清潔で真っ白な壁、木製の赤みがかった鮮やかな柱、3階まで吹き抜けになった天井とシャンデリアのような照明、プロのピアニストが弾く音楽、果てはティーポットに至るまで細部まで凝られており淑やかなメイドが壁際に立つて注文を静かに待つていて、その体験はちょっとくらい紅茶が割高でもぜんぜん損した気分にさせないものだった。

館は内部だけではなく、庭も凝つたものだった。館の正面のテラスには、傘つきで純白のテーブルセットがいくつも並べられていて、螺旋階段から行ける2階のバルコニーでも食事が楽しめた。3階はヴィオレットの園全体が見渡すことができ、個室のみの提供で、有料だが特別な雰囲気が楽しめる場所だった。館は5階建てで4階以上は従業員以外立入禁止だった。

(メイドさんばかりなのに女性客が多いのはこの素敵な雰囲氣があるからだと思う!)

彼女はそこでの体験に満足していた。

そのとき、彼女のテーブルにいきなり少女が腰かけた。

「ごめんなさい」

その後ろにはメイド長のマヤが立っていて、強い警戒心でテリリを睨んでいた。

テーリはいきなりのことで混乱したが、合席した少女がマヤより偉い立場にあると推察されたので、彼女はたずねた。

「ヴィオレット……さん？」

「ええ、そうよ。よくわかったわね」

「だってマヤさんが後ろにいるから……」

「そうじゃないでしょ」

彼女は件のイヤホンを見せた。

「貴女がスパイだつていうのはわかってるのよ」

テーリはそれを聞いてぞつとした。

(うそ……)

しかし彼女は瞬時に推理した。

(いや、確信があるなら有無を言わさず強引に拘束すればいいだけ。なぜ彼女がそうせずばくに質問してるのか、考えろ)

彼女は一瞬で結論に達し、知らぬ存ぜぬを貫くことにした。

「なんのことですか？」

「ふざけないで！　冗談で言つてるわけじゃないのよ。一見なんの変哲もないイヤホンに見

えるけど通信機ね。どこのだれにここのことと報告していたの？」

「彼女は念のため偽造IDを用意していた。

「ホワイトアース・ジャーナルのハセガワ・マリです。極秘の取材でした。すみません」

彼女は内心冷や汗をかいていた。

（ヴィオレットさんがどこまで掴んでいるかはわからない。でもなにもかもわかっているならぼくを尋問する必要はないはず。これはポーカーだ。はつたりでなんとかなる）

ヴィオレットはたしかに彼女がホワイトアース・ジャーナルの記者だとしても、辻褄は通ると感じた。

しかし彼女はまだ疑っている点があった。

（彼女の持ち物にフィルムカメラがあった。記者ならデジタルカメラを使う。フィルムを使うのは警察くらいだ。彼女は記者じゃない）

「单刀直入に聞くわ。貴女はスペイよね？」

「いいえ」

「じゃあ、私のこと知ってる？」

テーリはきょとんとした。その質問の意味がわからなかつた。

「ヴィオレットさんでしょ。この館のあるじの……」

ヴィオレットには彼女の言葉がうそには見えなかつたが、それでも疑つていた。（もし彼女が私をスパイしているのだとすれば、私がゴースト・メイデンだということをわかつていなければおかしい。いや、それとも私がゴースト・メイデンだと知らずに別の理由でここにきてる？ ルビーとローズのほうをスパイしている？ だとすれば慌てて彼女を消す必要はない）

彼女は納得し、たずねた。

「ホワイトアース・ジャーナルのハセガワさん。ヴィオレットの園へようこそ。そういうことにしておくわ。じゃあ、なんのために極秘の取材をしにきたのかしら」

「そりやあ、ヴィオレットの園は秘密主義で公式サイト以上の情報が見つからない。それで損だと思いませんか？ もつとたくさん宣伝すればお客様もたくさんくる。だから実際のところこれがどれだけすばらしい場所なのかを報道するために……」

ヴィオレットはため息をついた。

「うちのやり方に口を挟まないで頂戴」

「そうですね、すみません」

「で、貴女の評価は？」

ヴィオレットは実のところどう思われているのかが知りたくてうずうずしていた。

テーリは今度は本心を話した。

「こつ、ここはほんとにすばらしい場所だと思います！ ゼひまたきたいです！」

いきなり身を乗り出してきた彼女にヴィオレットは驚き半分うれし半分だった。

彼女はひとつ咳をした。

「じゃあ、ここはひとつ、貴女がスパイでないと信じることにする。どうかしら。うちにで働く
いてみない？ 貴女、見込みがあると思うわ」

「えつ、それってホワイトアース・ジャーナルを辞めてってことですか……？」

「まずは副業でも構わないわ。メイドとして雇いたいの」

それはヴィオレットの策略だつた。

(もしこの女がスパイだとしてもそうでないとしても秘密でなにかを探りにきている奴をこのまま逃がすわけにはいかない。彼女をこちらに抱き込む必要がある。そして普通ならこんな提案、乗つてこない。彼女が乗つてくれればそれは彼女がこちらのなにかを探ろうという魂胆があるということだ)

テーリもその言葉の意図を探りつつ、この提案に乗るのが得かどうか考えていた。

(ぼくを迎えて監視下に置こうというわけ？ この園ではなんらかの取引が行われている。ふたりの女性とヴィオレットさんがグルなのか調べなければ！ もしここで頷けばか

れらに監視されることになる。けど、逆にぼくも従業員以外立入禁止の場所を見ることができるようになる。ここは提案に乗つて潜入すべきだ……）

彼女は答えた。

「いいでしょ。ぼくもここは素敵なところだと思つていたところです。ぜひ！」
こうしてふたりは握手した。

その夜。

ヴィオレットの園の従業員は大きくメイドとエキストラに分けられた。エキストラは園の営業終了とともに帰宅して男性従業員も多くいる。メイドは全員女性でヴィオレットの館に住み込みで働き、庭園や館の管理のほか、ヴィオレットのお世話もする仕事だった。

テーリはメイドとして働くので、ヴィオレットの館の4階に住むことになった。

彼女は4階を案内されているとき、各部屋の扉のまえに設置されている認証システムがパンプキン・セキュリティの製品であることを見てしめしめと思っていた。

（これなら簡単にハイジャックできる。だってぼくが開発したシステムだもん！）

彼女はそれを表情にださずマヤにたずねた。

「このメイドさんって単にそういう制服を着ているだけじゃなくて、ほんとにメイドの仕事をしてるんですね」

マヤは初めてで不慣れなテーリーの着付けを手伝っていた。

「当然だ。この館は日中はお客様を迎え入れ営業しているがヴィオレットお嬢さまの私邸でそれが本来の姿だ。これだけ大きな館を清掃するだけでもひと苦労だ」

「つてことは要するに、ここってヴィオレットさんの家……？」

「だからそうだと言つてゐるだろう」

「この園に防犯カメラだとか、そういったセキュリティ・システムがないのは、ここが彼女の自宅だから？」

「それもあるが防犯カメラなんてものはヴィクトリア朝時代にはなかった。神は細部に宿る。そういう細かい配慮がこの園の価値を高めているんだ」

「……それでも、すこしくらいセキュリティを気にかけたほうがいいと思う。もしここでなにかの犯罪が起きたら、責を負うのはヴィオレットさんですよ」

「新米のくせによく言う奴だな。どうでもいいがドレスはともかく、メイド服もひとりで着られないのか？」

「だって着方のわからない部品がいっぱいあるんですもん！」

「ドレスに比べればだいぶ簡単な構造のはずなんだがな」

「着るだけならひとりでできますけど、変な着方をしたら恥ずかしいです」

「それもそうだな。こうやって着るんだ。わかったか？　さあ、明日からは自分で着ろ。もう覚えたか？」

「ええ、もちろん。ありがとうございます」

またマヤはテーリからブレスレットを回収し代わりに従業員用の入館許可証を渡した。「ブレスレットはお客様専用。これがあれば基本、館内のどこでも自由に入出しができる。これから園に入出するときは、お客様専用の出入口じゃなくて従業員用の裏口を使え。金属探知機や荷物検査なしで入館できる」

彼女はそのとき感づいた。

(そうか。だからふたりはブレスレットをしてなかつたんだ。やっぱりヴィオレットさんがあのふたりに命令していた疑惑が強い)

彼女はそれに気づいたことを悟られぬようポーカーフェイスでたずねた。

「えっ、いいんですか？　ぼく新人なのに……」

「なにを言つてるんだ。新人だろうとなからうと仮にも従業員。ほかのメイドと同じ待遇だ。ただし5階はお嬢さまご自身のIDでないと開かないし、4階の幹部の個室も従業員用の入館許可証では入れない」

マヤはそう言つて幹部用のIDを見せた。

「幹部用のＩＤは個人識別情報が含まれているが入館許可証は従業員個人の区別はなく、番号対照表で区別されているが、基本的に開ける扉は同じ。4階は従業員のフロア。幹部も含めて4階で寝泊まりする。幹部以外の従業員は同じ部屋を複数で共有する。おまえはこの部屋の東側の上の段のベッド。5階は正真正銘、お嬢さまのプライベートな邸宅だ。幹部も含め招待されないかぎり立入禁止だ。わかったか？」

テーリは困惑した。

「2段ベッドって、カーテンで仕切られてるだけでプライベートもなにもないですよ」

「貴重品はロックカーにいれろ。これが鍵だ」

「そうじゃなくて！」

彼女は真っ赤になつて叫んだ。

「なにか不都合でもあるのか？」

「いえ、その……」

そして不自然にもマヤはテーリのすべての装備を返却した。

「従業員を信頼せずして経営はできない。それがヴィオレットお嬢さまの持論だ」

「……」

テーリはそれがなにかあやしくて怪訝な顔をして彼女を見つめていた。

彼女は装備を慎重に検討し盗聴器が仕掛けられていないか調べた。するとやはり盗聴器が仕掛けられていた。

(ここにある工具じゃ盗聴器は外せない。これじゃ本部と通信はできない。ヴィオレットさんはぼくが報告してぼろをだすことを待っているんだ)

この館はアナログなシステムが多く彼女は苦労した。しかし電子ロックの解除は彼女がもっとも得意とする領域だ。

彼女は2段ベッドでカーテンを閉めてブラジャーを脱ぎ、その下からワイヤーを抜いてとつた。ブラはもちろんつけなおす。

ピッキングみたいなものだ。電子制御と言つたって所詮は電気系統。電流の流れを制御すれば扉は開く。

それから彼女はあやしまれないように5階に向かつた。

その夜、マヤは5階のヴィオレットの私室に呼ばれ、彼女の相談に乗つていた。不安なことがあるとヴィオレットは言うのだ。

「マヤ、私不安なの。このままじゃなにもかも壊れちゃうんじゃないかなって」

ヴィオレットは19歳、マヤは27歳。ヴィオレットにとつてマヤは心強い部下で同時に精神的に頼りになる女性だった。

マヤは彼女にたずねた。

「お嬢さま、彼女がスパイだと仰っていましたね。それが不安なのですか？」

ヴィオレットはそれまでだれにもそのことを話したことはなかった。それはマヤでさえそうだった。だが彼女は長年の付き合いでもうマヤを信頼していた。彼女はたとえそれで解決しないとしても、こころのなかからこの不安を取り除くにはだれかに打ち明けるしかないと思つた。

「マヤ、ごめんなさい。でも貴女を信じて話すことにするわ」

彼女は話し始めた。

「私は地下世界では別の名前で呼ばれている。ゴースト・メイデン、と」「ゴースト・メイデン？」

「……私は暴れ過ぎた。そういうことよ」

「どつ、どういうことですか？」

「株取引で不正を働いた。地下世界ではゴースト・メイデンの仕業だと言われてる。でもほんとうは私。もしそのことが明るみになればこの園は政府に没収されてしまうわ」

「……」

「私は奴を警戒している。マリがスパイだという確証はない。でも私はみんなを守るために最

大限の警戒をしなければならないのよ」

マヤは彼女の告白が半分ショックだったが、半分はそんな秘密を共有してくれるほどに信頼されているのだという事実に心打たれていた。

- H I J A C K C O M P L E T E D -

テーリはその会話を彼女の部屋のまえで聞いていた。彼女にすればこの館のメイドたちは素人だ。警備は簡単に回避することができた。

彼女は電子ロックの回路の流れをブラのワイヤーで強引に変え制御系統を騙しロックを解除した。この館で採用されているセキュリティ・システムはパンプキン・セキュリティが開発しているものだったので彼女はそのバックドアを知っていた。

(ヴィオレット＝ゴースト・メイデン。でもぼくの目的はそれではない。彼女がしたことはいけないことかもしれない。でもそれを暴くのがぼくの仕事ではない……)

その日彼女はメイドとして館の掃除や翌日の準備等をした。彼女は運動神経には自信があつたがそういう問題ではなく、それはそうとうの体力勝負だった。

彼女はひょっとしたらスペイの仕事よりもたいへんかもしれないと思いつつ、くたくたになつて眠つた。

彼女が眠りに就いたあと、マヤが彼女の部屋のロッカーをマスターキーで開け、持ち物

を調べた。

しかしマヤの調べでは、最初に提出した金属類以外にあやしいものはなかつた。テーリはもし拘束されても情報が漏洩しないよう、本物のＩＤ等は潜入時には持ち歩かないことにしていたのだ。

翌朝午前7時、テーリは最初にフィルムカメラに仕掛けがされていないか調べた。それはデジタルカメラより細工は難しい。見たところ細工はされていなかつた。

開館は午前10時。彼女はそれを持って例のふたり組の女性を待ち伏せようと考えた。

しかし彼女が館を出ようとすると、マヤが彼女の耳を引っ張つて止めた。

「ハセガワさん、仕事がありますよ。あなたは庭園ではなく館の勤務です。10時までに館の掃除！ 埃のひと粒に至るまで徹底的に！」

「は、はい」

どうせあの女性らがやってくるとも限らないわけだし、彼女は10時まで掃除することに決めた。

意外なことではないかもしけないが、開館前の館では掃除ロボットも活用されていた。服装はみんなヴィクトリア朝のそれだがドローンがどこからともなく現れて掃除している光景はどことなくスチームパンクを思わせた。

それでもドローンの掃除は完璧ではない。メイドたちが花瓶のひとつまで除け隅々まで
ていねいに掃除していた。

「ヴィオレットさん、意外とこういう機器も使うんだ」

マヤが怒鳴った。

「使用人は主人をお嬢さまと呼ぶこと！」

「へっ！？」

「それとお嬢さまはハイテク機器にも通じておられる。営業中は園の雰囲気を優先するがな
にもテクノフォビアというわけではない」

「だってセキュリティ・システムも導入してないって、そういうことが起きんばかりなのに
まるで……」

「まるで、なんだ？」

テーリは喉まででかかった言葉をぐつと飲み込んだ。

（まさか、ヴィオレットさんはそういう犯罪に利用される可能性があることを理解して、あ
るいはそれらの行為を把握したうえで『黙認』している？）

彼女は思いを巡らせた。

（……もし、彼女が犯罪組織から賄賂を受け取っていたとしたら……）

しかし彼女は別の考えもあった。

(……いや、ヴィオレット＝ゴースト・メイデン。これは彼女の弱みだ……脅迫?)

マヤが怒鳴った。

「マリ！ 手が止まっているぞ！」

「はっ、はい！」

ヴィオレットは私室で無音の盗聴器に耳をあてテーリの動向を探っていた。

(彼女、昨晩からなんの動きも見せない。しばらく泳がせれば通信して背後にいる何者かの正体に繋がるなにかがわかることを期待していたけど盗聴していることに気づいているのか)

彼女はひどく悩んでいた。

(それとも彼女に事情を話し助けを乞うか。だめ。それじゃあゴースト・メイデンの悪事が明るみになる。みんな終わりだ……)

ルビーとローズはヴィオレットの園の従業員ではなく、とある密売組織のメンバーだ。その組織は犯罪で稼いだ金を幾重にも洗い当局をまくための中継地点のひとつとしてここを選んだ。ヴィオレットは『黙認』するだけでよく仮に見つかっても彼女に繋がる証拠はなにも残らない。それは組織が彼女に『黙認』するのが最善手だと納得させるための

情報操作でもあつた。

組織はヴィオレットの弱みを握り、『黙認』を強制していたのだ。

ヴィオレットの弱みはゴースト・メイデンのことだつた。

彼女は過去、企業のシステムをハッキングして情報を得て株取引をした。彼女に繋がる証拠は残さなかつたが、そういった活動をしている人物がいるということは知らず知らずのうちに噂になつていた。

その人物は地下世界で仮にゴースト・メイデンと呼ばれ、賞金を懸けられた。

彼女はそのことをしばらく、知らなかつた。

彼女は株取引で得た利益でこのヴィオレットの園を建設。

経営は順風満帆で波に乗り、ゴースト・メイデンの活動は不要になつて、停止した。

しかし、ある日ヴィオレットはゴースト・メイデンという名前で賞金が懸けられていることに気づいた。ヴィオレットの園の成長曲線とゴースト・メイデンの活動記録を照らし合わせればゴースト・メイデン＝ヴィオレットという結論には簡単にたどりつくだろう。

そしてそれは最悪のかたちで現実のものとなつた。組織が彼女を脅迫したのだ。

ルビーとローズは組織の末端だつたがヴィオレットはふたりに逆らえなかつた。

彼女はルビーとローズに従業員用の入館許可証を渡した。ブレスレットがなくとも館内

を自由に入り出しき、荷物検査や金属探知機のない従業員用の出入口を利用できる。

要求は当初こそただ単に『黙認』すればいいというものであつたが、徐々に交渉が威圧的なものに変わりつつあり、ヴィオレットの園の売上をいくらか納めろと要求されていて彼女は組織と縁を切りたいと願つていた。

しかし組織が握っている彼女の弱みには園を潰せるだけの力があつた。

ヴィオレットは苦惱していた。

(もしマリの背後に組織に対抗できる後ろ盾があるなら彼女を頼ることはできる。でも、同時にゴースト・メイデンとしての過去を暴かれてしまう可能性がある)

彼女は悩んでも結論を出せなかつた。

(まだこっちは動くのは時期尚早すぎる)

ルビーとローズの仕事はいろいろあるがそのひとつは毎月ヴィオレットの園で洗濯した金を受け取ることだった。資金洗浄の手口は彼女らのような末端には極秘事項だったが、組織は国外の犯罪組織と連携しているともっぱらの噂だった。組織はほかの犯罪組織と手を組み、犯罪で得た金を世界各国あちこち移動させ、最終的にイギリスの別の組織に戻るようにし、洗われた現金をヴィオレットの園で受け渡しする。ルビーとローズは受け渡しを実際に行う役目だった。

犯罪組織の給料日のようなもので、毎月10日前後の平日に数日かに分けて行われた。

だからルビーとローズはまたヴィオレットの園を訪れた。今月の洗濯はこれで最後だ。「ローズさん、毎月2、3回の仕事で済むなんて、楽なバイトですね。わたしこの仕事始めてから本業がばかばかしくて」

「ルビー、失敗すればいのちが危ないことを忘れるな。もつと緊張感を持って」

「でも組織に反抗すればヴィオレットさん、終わりですし、ぜったい言えないですよ。それより組織つて、どうしてこんなに毎回回りくどい方法で場所を指定するんでしょう。同じところだつたらすぐ見つけられて楽なのに」

「同じところに埋めたらすぐ気付かれてしまうだろ。100万ポンド単位で動くんだからそれくらい楽なもんさ」

ヴィオレットはルビーとローズが従業員用の出入口から入ってくることが監視システムでわかった。そして彼女はもし今月ふたりを捕まえるとすればこれが最後のチャンスだとわかつていた。

しかし彼女にとつて、ふたりを捕まえることは組織に園を潰される危険もある、過酷な選択だった。

(でも、組織がいつ不当な要求をしてこないともかぎらない。このままふたりの言いなりで

一生過ごすなんてごめんだわ！ ヴィオレットの園は、犯罪組織の道具じゃない！）

「彼女は決断し、マヤを呼び出した。

「マヤ、部屋にきて頂戴。それから……マリも」

マヤはテーリに伝えた。

「ハセガワさん、ヴィオレットお嬢さまがお呼びです」

ふたりはすんずん歩いて館の5階へ行つた。

ヴィオレットはあくまで余裕がないことを悟られないポーカーフェイスで言つた。

「マリ、貴女の行為を叱責するつもりはないわ」

テーリは彼女の意図が半分くらいわかつていた。

（彼女が犯罪組織に賄賂を受け取つてているのか弱みを握られているのか。それを判断する材料がいる）

彼女は答えた。

「叱責？ なんのことでしょう」

「この期に及んでまだとぼける気？ 貴女のスパイ行為についてよ」

「昨日の今日でまたですか。てっきりあなたはマヤさんに用があるのかと思いましたが、ぼくに用があつて呼びつけたのですね」

ヴィオレットはそう言われて、

(見抜かれてる)

と感じた。彼女は威圧的に言った。

「だったらなんだって言うのよ」

テーリは冷静に答えた。

「なぜぼくをもっと強引に拘束しないのですか?」

ヴィオレットは困惑した。

「え……?」

「もしあなたに確信があるならこんな遠回りなことをする必要はない。ちがいますか?」

「……たしかにそうね。もう单刀直入に聞くわ。貴女のバックにいる組織が知りたい」「ホワイトアース・ジャーナルです」

「私はそうは思わない」

「なぜですか?」

「貴女がフィルムカメラを持ってきていたからよ。報道機関はデジタルカメラを使うわ。フィルムカメラが必要なのは法廷で有効な証拠が必要な法執行機関よ」

テーリは順当な推察だと感じ驚きはしなかった。

「ついでに言うと貴女がアメリカ合衆国と通信をしていたことも突き止めているわ」

それはテーリにとつて新事実で、彼女は一瞬動搖してしまった。

ヴィオレットは彼女のそのわずかな表情の動きを見逃さなかつた。実のところ本気で彼女がスペインのだととは彼女自身半信半疑だつたのだが、その動搖がその疑惑を確信に変える材料になつた。

「アメリカ合衆国の法執行機関がイギリスに、対外諜報機関ね。CIAかしら?」

「……いいえ」

「じゃあ、NSA?」

「……」

テーリはたとえ仕事でもうそをつくのが苦手だつた。彼女は押し黙つてしまつた。

「いまの反応で確信したわ。貴女はNSA局員ね」

ヴィオレットはそれで内心勝利を確信した。

(これなら彼女の力を借りれば組織に対抗できる!)

ヴィオレットはテーリにゴースト・メイデンの事実は知られていないと思つていたのだ。

ヴィオレットは矢継ぎ早に言つた。

「……もし貴女がルビーとローズを追跡してここにきたのであれば、協力できることはな

いわ

テーリは彼女がそう発言したことであいまいだつた疑惑が確信に変わった。

(やつぱりヴィオレットさんは脅されていたんだ!)

それで彼女は真実を話そうと思つて答えた。

「ええ。ぼくの目的はルビーとローズの追跡です」

「やつぱり！ そうだったのね」

テーリは内心迷っていた。

(ヴィオレットさんがゴースト・メイデンだということ……それは、ぼくが聞かなかつたことにすれば当局にはわからない。もし彼女が犯罪組織に脅されているだけで、かれらに对抗する力を探しているのだとすれば……)

彼女は先回りしてたずねた。

「ヴィオレットさん、もしふたりに脅されているのであれば力になれるかもしれません」

ヴィオレットにとつては、脅されるような事実があるということが知られるのはあまり好ましくなかつた。

「なぜそう思うの？」

「いえ、その……捜査状況をあまり細かくお伝えすることはできませんが、ここで犯罪が行

われていることは明白です。もしあなたが犯罪組織に目をつけられて、意に反してその行為に加担させられるならば、お力になれると思つただけです」

ヴィオレットはひょっとしたらテーリがすでにゴースト・メイデンのことも突き止めているのかもしれないという考えが頭をよぎった。NSAと組織のどちらを敵にまわすのがより厄介かという話でしかも、NSAはひょっとしたら将来敵になるかもしれないが、現時点では実害があるのは組織のほうだ。ここは彼女を味方につけることが得策と考えた。「……ハセガワさん、認めるわ。私はふたりに脅されているの」

それはマヤも知らなかつた事実だった。

「おっ、お嬢さま！　ずっと秘密になさつていたのですか？」

「ええ、相談できなくて。昨日……あのことを話したわよね」

マヤはそれで理解したが、その場にはテーリもいたのであわせて具体的には言及せずに答えた。

「……ずっと、お悩みでしたのね。私はずっとそれに気づけず、不甲斐ない……」

「いいのよ、マヤ。ハセガワさん、どうかしら。もし私たちの利害関係が一致するなら、ふたりを捕まえることには協力する。その代わり貴女の上にとりあって、組織から私たちを守るよう動いてほしいの」

テーリはそれを約束できるだけの権限がなかつたので、正直に答えた。

「上司に連絡してみます。通信機につけた盗聴器を外してください」

「……やっぱり、気づいてたのね。工具はマヤの部屋にあるわ。マヤ、外してあげて」

「お嬢さま、ですが、彼女がほんとうにNSA局員だという証拠があります」

「私は確信している。彼女がNSAかどうかはともかく、組織に対抗できる力のある組織の人間だってね」

「それで園の命運を賭けることは妥当な判断とは思えません。ほんとうにそのような組織に所属している証明がなければ、ふたりを売ることには反対です」

「マヤ、いいのよ。今更身分証明書なんて見せられても証明になるとは思えない。彼女はすでに偽造IDを提示しているんですからね。それより彼女の実際の通信を聞くほうが、ずっと説得力がある。すくなくともそういう通信をする相手がいるってことですからね。マリ、まだ完全に警戒を解いたわけじゃないわ。貴女の所属の証明も兼ねて、通信内容はそばで聞かせて頂戴」

こうしてテーリの通信機につけられた盗聴器が外された。当局は逆探知だけでなく盗聴されていることもさまざまデータを計測し遠隔で知ることができる。盗聴されていると向こうが判断すると通信は切断されてしまう。

「当局は電話の音声から周辺を立体映像に起こすことができます。話者の近くにだれかいれば、必ず気付かれます」

「そんなことが可能なの？」

「さすがに隣の部屋にいれば壁があることくらいしかわからないとは思いますが……」

4階以下には常時大勢いるので、ヴィオレットは5階の書斎を彼女のために用意しその隣の部屋で彼女の通信を聞くことにした。

テーリは通信で言つた。

「報告が遅れました。いまヴィオレット邸にいます」

《無事か？》

通信相手の声を、ヴィオレットは増幅器で拡大して聞いていた。

「ええ、でも、すこし妙な話になつています」

《具体的に話してみろ》

「資金洗浄はイギリスの犯罪組織によるもので、ルビーとローズというふたり組の女性がその実行犯です。ヴィオレットさんは犯罪組織に脅迫され見て見ぬふりをしていた。それ以上のこととはまだわかつていません」

《どこが妙なんだ？》

「……ヴィオレットさんはルビーとローズの逮捕に協力する代わりに当局にヴィオレットの園の保護を要請しています」

『保護？　ばか言うな、他国の事業をどう保護しろと言うんだ』

「当局からイギリスの犯罪組織に警告するだけで効果はあると思います」

『それなら可能ではあるな。考えてみよう』

「……それと、ヴィオレットさんは当局がそれが可能なだけの力のある組織なのだとということを証明することを要求しています」

『なぜ当局がそれに応じなければならない』

「応じなければルビーとローズの逮捕には協力してくれないでしょう」

『……ニュースを見ると伝える』

通信は終了した。

テーリの話をこつそり聞いていたヴィオレットは急いでホワイトアース・ジャーナルのニュースを見た。

ニュースに緊急テロップが表示されていた。

『FBIがイギリスで組織犯罪の資金洗浄が横行していると指摘。明日にでも国際刑事警察機構を通じてイギリスに対策を要請する見通し』

ヴィオレットはホワイトアース・ジャーナル以外の局も念のため閲覧した。彼女が通信していた相手がNSAではなくホワイトアース・ジャーナルだったという可能性もある。しかしその局でも同じテロップが流れしており、ホワイトアース・ジャーナル一社の意向でできることではない。明らかに情報操作が行われていた。

それを見てヴィオレットは満足気味に言った。

「ありがとう。NSA……かどうかはまだ半信半疑ではあるけれど、これほどの情報操作が即座にできるほどの組織が味方になってくれれば、私としても安心して営業できるわ。それよりマリ、さつきルビーとローズが園に入ってきたの。それと彼女らが園にくるのは今月はこれが最後よ」

「今月はこれが最後!? ってことは、証拠を押さえるのは今日を逃せば来月……!」

「そう、急ぎなさい。マヤ、メイドたちには彼女の邪魔はしないよう伝えておきなさい」

「承知いたしました」

テーリはいつも時間がないのはそういう星のもとに生まれたのか泣きながら館の階段を駆け下りた。ヴィオレットの館にはエレベーターもなかつたのだ。

ヴィオレットとマヤの根回しで彼女はだいぶ楽に動け、録音も撮影も許可された。

ルビーとローズはやけに遠回しな表現で指定された金の在処を見つけるのに苦労した。

地図や写真ではなく文章での指定で、組織の人間にしかわからない暗号文を使っていた。

「こんな方法で指定するの、意味あるのかなあ」

ローズが思わず愚痴を言つた。

「たとえこの文章が流出しても簡単にはわかりません。ヴィオレットの園ってかなり広いですし」

「そんなこと言つたってなあ」

「100万ポンドも埋まってるんですから慎重なことに越したことはないですよ！」

テーリはフィルムカメラを持ち録音しつつふたりを尾行していた。ふたりが訓練された人間ではなく雇われの素人であることがテーリには簡単にわかつた。

かれらがああでもないこうでもないと探しまわっているうちに日が暮れつつあり、彼女はすこしうんざりしつつも粘り強く待つた。

そしてついにふたりが埋められた100万ポンドを見つけ、思わず中身を確認して現金が見えたその瞬間、テーリはシャッターを切つた。

彼女は録音と写真を当局に送信。

当局は彼女の証拠を現地警察に流し、その結果捜査が開始された。

ルビーとローズはすみやかに逮捕されたが、背後には依然として巨大な犯罪組織の姿が

あつた。しかしルビーとローズの逮捕の裏にNSAが関与していることを察知した組織は、ヴィオレットの園は当局の保護下にあると判断し、以後、園には手出しをしなくなつた。

当然ヴィオレットにも疑いの目は向いた。ゴースト・メイデンの秘密は守り通したが、園内で犯罪捜査が行われた事実はヴィオレットの園の営業に少なからず影響した。しかし園の規模から考えて誤差のようなものだつた。

後日、テーリは仕事ではなくプライベートでヴィオレットの園を訪れていた。

ヴィオレットは基本的に頭の切れる聰明な女性だ。ふたりはテラスで向き合い、マヤが紅茶を淹れ、ヴィオレットはテーリに言つた。

「あのときはありがとう、マリ。お礼というわけじゃないけどひとつだけ教えてあげる」

テーリは紅茶を嗜みながら答えた。

「なに?」

「地下世界の存在……」

このときもヴィオレットはまだゴースト・メイデンのことは秘密だったから慎重に言葉を選んでいた。

「スペイ、ハッカー、スナイパー……。正体不明でも必ずいるにちがいない。そういうつた敵

に賞金を懸けて暗殺する世界があるの」

テーリは紅茶を啜り、黙つて聞いていた。

彼女にとつて、それはどこか遠い世界の話でしかなかつたのだ。

すくなくともこのときは、まだ。

「貴女ほどの腕利きのスペイであれば、必ず懸賞金がつく。気をつけなさい。貴女、いつ暗殺されてもおかしくない。そういう世界にいるのよ」

「ぼくに懸賞金？　だれが？」

「世界中の犯罪組織、軍隊、諜報機関、その他無数に考えられるわね」

「相手が何者か、いるかどうかすらわからないのに賞金を懸けるの？」

「どんな凄腕のハッカーでいかに正体を隠しても、そうやって正体を隠して活動する何者がいるという事実だけはぜつたに隠せないわ。そしてそういう奴のくせや行動傾向をもとに分類し、仮称をつけて賞金を懸けるの」

「うそみたい」

「ほんとの話よ」

「ぼくには関係ない」

「命取りになる謙遜ね」

「……」

ヴィオレットは深刻そうに言った。

「ルーキーはみんなそうなの。みんな出しゃばる。上には上がいるって知らずに、自分の能力を過信して目立つ行動をする。井の中の蛙なの。ぜつたいに懸賞金はつく。地下世界の存在にさえ気付かず、知らず知らずのうちに賞金を懸けられて殺される。そういうのがほとんどよ」

テーリはそのとき冷静に彼女自身を分析し、たしかにそういう可能性は否定できないと感じた。

「……ぼくにどんな名前で懸賞金がついているのか知ってるの？」

「いいえ。でも必ずつくわ。貴女なら、必ずね……」

ヴィオレットは紅茶を飲み干してたずねた。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかつたわね」

「なんのこと？」

「とぼけないで。貴女は偽名で活動していた。ちがう？」

「さあ。答える価値がある質問とは思えないけど」